



郵便
報知新聞
第七百八十八号

深川常盤町大工職高柳半七娘はとうとうの
巨向の家小本公母一ツ首尾能勤め終つたけれど
身の廻り所有の品貯金も若干と賜り親里へ
帰るけりが千九百二十色漆器盛りの花と心風よ
不面誘引れと悪漢の亜森下町岡田吉五郎が為
みとのとこれ所持の金三田衣類三余品と欺り
れ詮方なきら連立て上総の智蔵へ心差込行
けり父半七の心痛し諸方へ尋ねまかりあて不日
行衛と求かひ直し著電へ教許せしと忽ち
六と京押懸々説諭は後悔いといと再び奉公ふ
出たじと吉五郎の情欲を人目と忍び出逢居り
たゞ半七の煩々思ひ掛りも神明祭の参詣
せる途中に出會はば吉五郎は娘と事ふ世にひと
云ひ強説し持餘を半七の程能挨拶して行過れ
と半七は傍若無人是非多く花と半七早も吉五郎
と半七と持付打過行と半七より致す由書連し
行くことしとぞ



南兵四十四番地
月岡米次郎画
小舟町三丁目
土番地熊谷庄七

六福
門人 年谷

